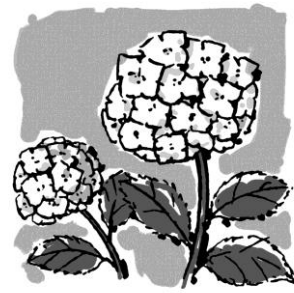


六月のテーマ

親の子、子の親



え・城谷俊也

流れを遡ると 心は未来へ向かう

ユ

ネスコの推計（2015年）

によると、世界の成人非識字者（読み書きができない大人）は、約七億八千万人とされています。

では、なぜ私たちは文字を読むことができるのでしょうか。

学校で教育を受けたことが理由の一つです。また、それ以前に、親から教わったことが大きいのではないのでしょうか。

家の引越しのために片付けをしていたYさんは、幼児期に字の練習をしたノートを見つけました。文字はマスからはみ出し、本来の字の形とは違ったものも書かれています。これまで記憶にありませんでしたが、そこには、学校に入る前に、わが子のために字を教えてくれた両親の愛情の痕跡が残っていたのです。こうしたことを日常生活の中で自覚する機会は、そう多くないでしょう。

倫理研究所の富士教育センターでは、研修の中で、親祖先への思いを深める「恩の遡源」という講習を行なっています。講習では、両親やお世話になった人との関係

の中で、「自分がしていたこと」と「ご迷惑をおかけしたこと」「して返したこと」の三つを幼少期、青年期、そして現在に至るまで、時代を区切って振り返る時間を設けています。

参加者は皆、初めはなかなか思いつきませんが、徐々に心は時代を遡り、「していただいたこと」に支えられて今の自分が存在することになり、至るようになります。

さらに思いが深まると、「自分は何と親不幸だったか」(見守られてありがたう)といった反省や感謝の念が湧きあがってくるようになります。

「遡源」の「遡」という字には、サケの遡上のように「水流に逆らって上の方へいく」「もとの方向へもどる」という意味があります。

私たちの生活の中で、命の流れの下流に位置するわが子には意識が向きやすいものですが、上流にあたる親や祖父母に対しては、意識が気薄になりがちです。子供の誕生日は覚えていても、親の誕生日や祖先の命日を忘れてしまうこ

ともあるでしょう。

恩意識を上流へ向けて、命の原点を見つめることが恩の遡源であり、「親祖先へ感謝を深める」具体的な取り組みです。

自動車販売業を営むHさんは、「恩の遡源」の研修について、次のように感想を綴っています。

親を恨み、口にはいけない言葉を、加減もせずにつけた時の両親の沈痛な表情が蘇り、辛い気持ちが入り込みました。

しかし、それでも両親は仕返しをするわけでもなく、見捨てるわけでもなく、我慢して愛情深く、全力で育ててくれたことを知り、改めて両親は凄い人だと実感しました。

今後は、敬慕する両親のように、自分の子供に対して、寛大な心で育てていくことを決意します。

命の上流に思いを向けるほど、「一所懸命やろう」(精一杯働こう) (恥じないように生きよう)と、心は未来へ向かっていきます。

先達から預かった命のバトンに、さらに良き歩みを刻み込み、子孫たちへと受け継ぎたいものです。